



TITLE:

弔ひの言葉 (故中村要氏追悼號)

AUTHOR(S):

---

CITATION:

弔ひの言葉 (故中村要氏追悼號). 天界 1932, 12(140): 503-514

ISSUE DATE:

1932-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162288>

RIGHT:

## 弔ひの言葉

拜啓、唐突乍ら拙書を呈し奉候。

中村要氏御死去の報導は、吾々會員をして全く我が目を疑ひ、我讀聲を疑はしむる程の驚きと、言語に盡し得ざる失望を感じしむるものに有之、殊に、殆んど隻腕を失はれたるにも比すべき先生の御落膽、拜察に餘り有り、何とも御挨拶に窮する次第に御座候。

小生京都在住の頃は、夜間毎夜天文臺に御邪魔仕り、種々御指導を受け候ひしが、小生如き單なるフワンに對してすら、懇切なる御指導に貴重なる時間を割愛せられ候事、今更乍ら感銘深きもの有之候。

今回の事、意外とも何とも申様無之事乍ら、所謂『何が中村氏を死に導きしか』は、期せずして氏の御死去に同情する者の腦裏を去來する處、沈思歎息を禁じ得ず候。

『天文學者も亦人間なるに！』

中村氏が、吉田町時代、ドームの下の作業室にベニガラに塗れ乍ら、餘念もなく鏡を磨き、ピッチをこねられるを拜見し、小生は其献身的生活に最高の尊敬を感じ乍らも、しばしば前掲の一語を胸の内に繰返し、而も目のあたりに、氏のニコニコしたる温容を見ては、唯々驚異的尊敬を増すのみに有之し次第に御座候。前後の御事情は如何なるにせよ、小生は小生の視方を以て、得易からざる天才が結ぶべくして結ばざりし、更に大なる實を惜しみ、暗涙を禁じ得ず候。唯、願はくは今後社會一般が、小生の目下の心境を以て學者を見てくれたならばと、そののみ心に祈りて、遙かに、若くして逝きし中村氏の冥福を祈るものに有之候。

氣儘なる言を長々と申述べ、御左右相煩はし候事、幾重にも御詫申上候。

早々

九月十五日夜

天文同好會員 佐藤 八郎

山本一清様 侍史

二仲 御事情相許し候はゞ、天界十一月號は『中村氏哀悼號』となされ度希望を有し候、

秋晴の好シーズンの折から、我等の師中村要氏の永久別なるを知り驚愕の至りに御座候。

本日大毎の紙上に目を通ほし居り候處、はからずも右の如き報道に接し夢か幻か當惑致し居り候。

嗚呼天界の權威中村要氏の死は惜しむべき悲しむべき至りに御座候、回顧するに、氏は彗星課に、レンズ作製に、特殊の技巧を有せられ、殊に1932年は正に彗星の豊年に、來るべき獅子座に、氏の活躍は天界に一大センセーションを起さるゝ事と期待的に致し居り候。あゝ今は遠く黄泉の人となられ申し候小生此處に謹んで故中村氏の靈を弔し奉り候。

尾道市 片山雅彦

花山天文臺御中

拜啓 時下秋冷の候に御座候ところ先生には 益々御健康の事と拜察仕り候小生長々御無沙汰仕り何とも申譯の言葉も無之、平に御赦しの程を願上候。偕て去る24日の大阪毎日新聞にて中村要氏の〇〇を伺ひ申候が、事實に御座候や、否や、萬一にも事實とすれば誠にお氣の毒な事にて、將來ある氏として又先生にあらせられても眞に惜しき事と存じ候。小生としては種々御世話に相成候ひし人の事とて、一層其感を深く致すべく候

同好會 元觀測部員 榎原徳三郎拜

山本一清様

前略

本朝新聞紙の報道にて中村要君急死の事を承り驚入りました。まことに悪いことをしました。何とかこれ程にまで進まない中に方法や治療の道はなかつたであらうかと獨り思ふて悲しくなります。

とりあへず御見舞申述ます。

九月二十六日

水澤 山崎正光

山本博士机下

Sept. 26th 1932

山本一清先生 玉案下

兵庫縣魚崎町東横屋 井 本 進

拜啓

廿五日の大阪毎日新聞の報導に依れば中村要様には 不慮の御急死との事實に驚きました。何度も繰返し読み夢ではないかと疑つた次第です。先生の日頃の片腕とも云ふべき人、將來誠に有爲な 秀才を失はれました事、御落膽の程如何許りかと存上ます。中村様は去る三月拙宅へ御來訪の時、種々と御話しも伺ひ近日花山へ御邪魔する様、申上げ居りましたのに、其後多忙の爲め伺へず、遂に最初にして最後の御別れとなつた事、誠に遺憾此上も無き事です。

先は乍失禮書中を以て御弔詞申述度 頓首

山 本 一 清 様

拜啓

近來御無沙汰致し失禮に打過ぎて居ります。惡しからず御宥恕下さいませ。新聞紙上にて承れば中村要様御逝去の山眞に哀悼の極みであります。

有爲なる人材を 喪ふことの損失——然し中村さんを知る者の哀しみの情はもつともつと大きく深刻である様に思ひます。

はるかに哀悼の意を表します 再拜

昭和七年九月廿六日

山口にて 惠 藤 一 郎

九 月 二 十 六 日

島 本 徳 三 郎

山本一清先生 臺下

拜啓 先晩は御高教難有奉存候

中村要氏御永眠、驚愕の裡に相承、爲學界遺憾此事、尊臺の御失望只々拜察の至に奉存候。

本日會葬、親敷御悔も申上度存居候處、校務難差繰、乍遺憾、弔意を代人に托し申し候。何れ拜顔萬縷御悔可申上候へ共、不取敢卑情申述度、如此御座候。 早々。

拜啓 本日大阪毎日紙上に、中村要先生が〇〇されたとの事が書いて有りましたので、非常に驚き悲みました。謹みて哀悼の意を表します。

つきまして中村先生の近頃の御寫眞が有れば 實費にて御わかし下さいませんか。

昭和七年九年二十七日 大分縣速見郡杵築町上町 渡 邊 恒 夫

花 山 天 文 臺 殿

拜啓 昨26日(京都ではその前日と思ひます)の大毎に出た中村要氏の悲報は事實でありますか。

氏を失ふ事は花山のみならず、日本否世界の大損失でありませう。

亂筆ながらおうかい致します。

富山縣上新川郡新庄町 正 本 隆 男

(中村氏作 303 號平面所持者)

山 本 一 清 様

中村要氏の計を新聞で知り驚きました。惜しい事をしました。哀悼の念に堪へません。

先生にも御力落としと存じます。まづは失禮のみ

和歌山縣有田郡金屋 小 槇 孝 二 郎

山 本 一 清 先 生

山 本 一 清 様

長野縣埴科郡東條村 中 澤 登

拜啓 中村様のことは何共申上様も御座りません。

乍末筆御内室様おはじめ皆様へおよろしくお願申上ます。 敬具

七・九・二七夜

謹啓

承りますれば中村要氏御逝去の趣誠に驚愕仕りました。先生初め花山諸賢の御落膽と御愁傷を深く拜察致して居ります。只今までの御業績より推して將來に於ける天文學界への御寄與は定めて著しきものと、いつも深く期待を以て氏を想ふて居りましたのに、未だ卅年にも満たざる年齢にて他界されるとは、申上げやうも無い遺憾であります。

學者或は事後あるときも、氏の如き天與の技術家は養つても容易に得られ

ぬ人物かと存じます。遂に御目にかゝらず終ひとなりました小生ではありませんが、衷心より御冥福を祈り、花山諸賢へ御辭を捧げる次第であります。不備

山 本 一 清 様  
侍 史

野 尻 正 英

天文同好會御中

中村要氏の悲報を紙上に拜見驚き入ると共に、その人を惜しむ情に不堪候。精力絶倫、創造に富まれたる氏が早世に對し千萬無量の感に打たれ候。

同氏が吾が國天文界に止まらず、世界的に進出活躍せられたる功績は偉大なものと存じ候。

殊に天文同好會のために盡され、以て小生等を教導せられし事を牢記致し候。同死の死は正に天文界の一明星を失ひたるものと存じ候。

痛歎おく能はざるもの之れあり候。茲に誠心弔意を表し度申上候 匆々

九 月 二 十 八 日

天文同好會員 津 田 雅 之

山本先生

中村先生が二十四日御永眠遊ばされた趣、御訃音（課通信）に接し驚きました。實に哀しい出来事です。御存生中、二度御會ひ致しました。

先日會議の時お會ひ致しましたが、至極御健康の様御見受申し御病氣の御事も一向存じ申さず、御命數なき御事とは申しながら御不幸の至で御座います。

略儀ながら葉書を以つて御弔詞まで 敬具

1932 IX 29

京都府福知山町東長 佐々木 一 二

去る26日同級の者より大毎に中村さんが逝くなられたとの記事が出てゐたと聞きましたので、眞偽の程をうたがつて見ましたが、新聞を見るに及びやつぱり記事を信ぜざるを得ませんでした。そこに今日荒木氏より課通信を受取り愈々確實になりました次第、つい此前親しく御話し申して實に元氣な快活な方だなどと思つてゐた人が今はすでに空しくなられたかと思ひますと、何とも云へない淋しさです。

殊に花山の方々には、何事も手につかず御悲しみの事かと御察しし申し上げます。

若くして天才的の頭脳を持つて居られた中村さんを 私共は心からしたつてみました。そして將來必ず世界の天文學界に一步先んずる人に違いないと、ひそかに期待してゐましたのですが、實に天の無常をうらみます。

得難き人を失はれた先生の御心中を御察し申し、はるかに哀悼の意を表する次第です。

九月二十九日

坂 元 鐵 馬

山 本 先 生 へ

先日は「天界」本月號多數御寄贈相成、深謝致します。

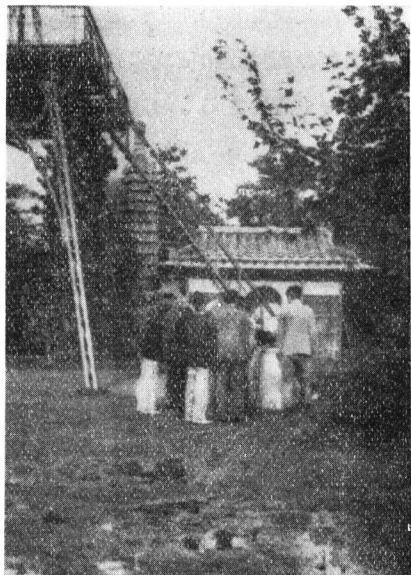
尙こゝに去る八月石山での會議の折、大津藤井天文臺にて撮影致しました未發表の寫眞がありますので、中村氏記念號に御掲載下されば幸ひです。

十一月二日

福 岡 坂 本 鐵 馬

天文同好會御中

右より 中村、山本、小山、稻葉、  
廣瀬、荒木、藤井、山田の諸氏



拜啓 久しく御無沙汰致しまして誠に相濟みません。昨秋小生歸神の節は不敏の爲御挨拶も不申、甚だ失禮致しました。何卒御容謝下さいませ。

懐しい皆様の御動靜はいつも中村先生御來神の折承つて居り、陰乍ら御幸福を祈つて居りました。然るに中村先生には先日急になくなられた由、昨日知人よりの來信にて初めて知りました。つい先日、十一日には須磨にて親しく御話し合つた程ですので、一時は茫然自失致しました。ホントウに惜しい方

を亡く致しました。天文臺の皆様御嘆きの程さこそとお察し申し上げます。

九月二十九日

神戸市長田明泉寺113の5

古川庄次郎

花山天文臺御一同様

山本一清先生

拜啓

御無沙汰致しております。さて突然ながら此度は中村要氏には思てもつかぬ大變な事になりました先生には御力落しの事と拜察致します。

新聞の記事を見まして茫然自失してゐる次第でございます。

早速御悔み申上る筈でございましたが御多忙の御事と思ひまして。

中村氏邸には南支部の名で弔電を發しておきました。

いつも花山を訪れました節は人一倍御世話になっておりましたので何と云つて御悔み申上げてよいか分かりません。未だ花山へ行けばあの溫顔に接する事が出来る様に思はれてなりません。

亂筆で失禮致しました。遅ればせながら御悔み申上ます。敬具

昭和七年九月廿九日

天文同好會大阪南支部 大阪市南區南炭屋町三十一番地 伊達英太郎

天文同好會御中

新聞紙上にて嘗ならぬ御報あり驚愕愁傷の至りに存じ候

中村恩師の天界に盡されし偉大なる功績を忍びて深く哀悼の意を表し候

十月二日

森正次

山本先生

中村さんの御逝去只々驚愕の外御座無、謹で哀悼の意を表し申上げ候

先生初め皆様御一統の御心中御察し申上様も御座なく候

二三日旅行不在失禮仕り候 敬具

十月三日

三澤勝衛

山本先生

實に大變なことになりました。誠に何と申上げてよいか分かりません。私と



しましても茫然自失の有様でありまして、漸く中村さんがほんとに亡くなられたのだと思ふ様になりました。日本の寶を失つたことは言はずもがな、天文臺として、又先生御自身として如何許り御失念の事と拜察致します。誠に借んでも惜しみきれない事であります。又特別に親しくして戴いた私としましても残念さと、追憶で胸がつまる思ひです。色々の後始末と整理とで御繁忙の事と存じます。遠く離れて御助力の出来ないのを遺憾に思ひます。

何れ追悼號でも出される事と思ひますが、其時は思ひ出でも書かせて戴かうと思つて居ます。

色々と一方ならぬお世話になり乍ら、其の御恩も返さないうちに他界せられて、どう考へても残念でたまりません。運命の餘りのいたづらに怖ろしくなります。

餘りの驚きで、どうしてよいか思ひ惑つて、御弔狀さへも差上げなかつた事を深くお詫び致します。

十 月 五 日

古 畑 正 秋

前略、中村要氏御他界の由を同好會員から通知を受け驚きました。只今入手した大阪天文研究會誌で同氏が八月以來病氣のため自宅に御引籠り中であつた事も始めて承知した様な次第で、突如訃音に接する事は全く小生も夢の様です。此前途有爲の人材を失つた事は我學界の爲に悲痛哀惜の情に堪えませぬ。願れば大正九年先生が人材登用の高き見地から同氏を引連れて各地に天文思想普及のため御遊説になつた折、偶々、御入信の事あり、信濃教育會主催の講演會があつた時、初めて中村氏の名を知つたのでありました。縦來同氏の熱意ある研究は漸次報ひられて先生の御指導を始め學界諸氏の御協力と相俟つて我國天文民衆化の今日ある盛大を致した事と存じます。多年同氏の研究を御指導になつた先生の御愁嘆は如何ばかりかと謹んで御悔み申し上げます。小生は、先生の御外遊中、同氏と私信の交換を始め、同氏により啓發せられた點は多大であります。以來十年、昨年七月始めて中村氏と面話する機會を得たのであります。十月號の「天界」(昨年十二月十日寄稿)にある『地上の彗星』は實は中村要氏の事であります。

中に書いた事柄は同氏と小生の對話です。事實は昨年七月十七日午後八時來宅當夜一泊されました。兩三日滞在せられる様勧めたのですが、當時天文臺に手の離されぬ仕事がある由で、心急がるゝがまゝに名残を惜みつつ、翌十八日歸洛に向はれました。これが永遠の御別れにならうとは！

此時が同氏と親しく語つた最初でもあり、又最終になつたのです。「地上の彗星」は小生として永く同氏を追憶する思ひ出の記となりました。

同氏の私信は第一信から最終のもの迄悉く保存整理してありますから何れ同氏の追悼號等の御計劃でもありましたならば小生からも拙い一文を靈前に捧げたいと思ひます。臺員各位へも先生から宜敷御傳聲願ひ上げます。

尙中村氏の御遺族に對しても先生から然る可く御傳言の程御願ひ申上げます。右謹んで御悔み申述べます。

昭和七年十月六日

宮島善一郎

山本一清様

前略 去る九月二十四日朝中村要氏が死去せられた様新聞に出てゐるのを見て、私は非常な驚きと失望を感じました。あの偉大な體軀と盡きない精力と鋭い眼を以て、クツクの三十糎のドームの中で活躍して居られる中村先生の事をいつも思ひ、又日本のカルバールとしての大成を確信して居た私は全く本當とは思はれんでした。然し寫眞迄載つて新聞に出て居ましたから事實でせう。

先生の御生前直接お會ひした機會は去る昭和五年五月始め惠藤先生が花山に行つて居られました際、偶然私も参りましたあの時一回切りです。然し手紙なり著書なりを通じて私の受けた恩恵は非常に大きいものであります。殊に先生に作つて戴いた十三糎反射鏡は私の最も良い友達として、私を星に親しませ、天に近づけて呉れます。

俄かの御死去の報に感慨に耐へず、直ちに中村要氏追悼の天體觀測會を師範學校寄宿舎生を對照として十月一日、一七日を期して行ひました。

絶好の良天氣に恵まれ相當の盛會でありました。先生も喜んで下さつた事と喜んでゐます。

當日會費一人一錢を同情ある方から戴きました。集まりましたお金は誠に

僅かですけれども中村先生の御靈前にお供へして戴きたいと思ひますので御送り致します。

これは中村氏宅へ直接御送附致す筈でございますが御所を存じませんので甚だ濟みませんが、お届け下されば甚だ仕合せです。

十月十五日 山口縣師範學校專攻科 今 井 清  
山 本 先 生

7 年 9 月 28 日

山 本 先 生 侍 史

拜啓先日はおはがき頂き、難有御座いました。干時中村氏が突然變死せられ實に驚き入りました。一體どうした事でせう？ 當方は大阪朝日新聞だものですから昨日迄も知りませんでした。大阪毎日新聞讀者の知人より昨日知らせ呉れ、漸く知り得た次第です。何といふ不祥事が出来たでせう！ 御病氣は亂視で夫れが爲め身體がつかれるとか申越され居りました。病氣とは思ひませずに居りましたが、新聞では神經衰弱悲觀云々とありまして、一層驚いた次第であります。實に日本の國寶をなくした事となり、御臺の爲め又日本天文界の爲め、眞に大なる損失となりました事を實に遺憾に堪へられません。先生におかせられましても無ぞ非常なる御愁傷御力落しの事とお察し申上ます不取敢昨日弔電申上おきました次第で御座います。(下略)

大 坪 雄 太 郎

拜啓

中村氏の書信百數十通及寫真スケッチ等可也澤山有之、今回の中村氏の爲めの特輯十二月號に相當選擇、多數御送附可仕考に有之候處、俄かに據所なき差支出來、昨日來當米子に參り居申候爲め、御送り申上る事出來ざる事を、實に遺憾に存じ候。何れ、今後機を得、御送り申上度と存じ居り申候。不取敢右迄申上げ候。匆々

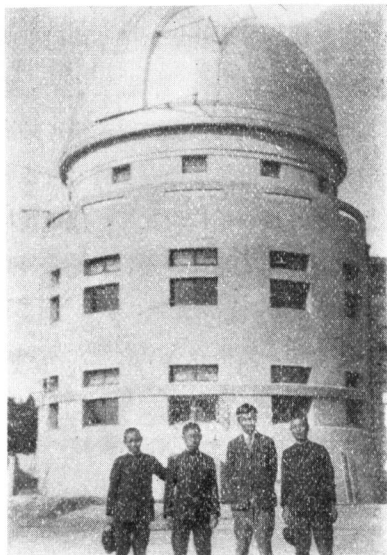
十一月四日

米子にて 大 坪 雄 太 郎

天文同好會編輯部御中

拜啓秋冷の候愈々御清祥の事と存じます。

偕、去る六日日曜日に會長山本先生を御中心に 東京支部の懇話會が五藤様の所に御在居ましたので小生も出席致しましたのですが、其際先生より中村氏の亡くなられた様子及び、生前今日までの御奮闘の有様を御話して戴きました。誠に小生も何とも云はれぬ氣持にて拜聴致しました。中村氏には小生



1929. 10. 14. 花山大ドーム前ニテ  
福本、内田、中村氏、小生

も大分前に一度御會ひ致しましたので、なほさら感慨無量で在りました。それで御會ひ致しました時の記事と寫眞を御送り致そうと思ひました、何とぞよろしく。

昭和四年十月十四日、私は恰度東京府立化學工業學校の五年にて修學旅行にて京都に参りました日であります。

前持つて、學校より天文臺の方へ通知して戴いてましたので、早速星好きの友人と共に三人にて花山に向ひました。天文臺に着きますと直ぐに一人の方が丁寧に御案内して下さいました。まだ出來たばかりの時でありましたが、機械類も皆整つて居ました。最後に大ドーム内を御説明して戴いております時に、中村要様が御見えになり、大望遠鏡や又其の使用法等御説明下さいまして後、中村様の研究室に御案内下さいまして 反射鏡の製作法鏡のフール試験法、平面鏡の試験法等御説明下さいましたが、誠に容易に、幼稚なる私達にも理解出來ます様に愉快に御説明下さいましたので 本當に有難ふ御座居ました。其れから屋上にて、色々と方々の景色や天文の御話を御聞せして戴き、修學旅行中とて時間に限りが在りますので、盡きぬ名残を惜みつゝ中村様と御一緒に寫眞を寫させて戴きまして、花山を去りました。

もうあの時より滿三年にもなりますが、未だに私の眼前にはいつでも中村様と思ふと直ぐにあの時の御優しい笑顔の御姿で御説明して居られる顔形が

浮んで参ります。それで私にはどうしても中村様が亡くなられたとは思はれないのです。

昭和七年十一月八日

西田太二郎

東亞天文協會御中

謹啓

秋冷之砌、益々御清適被涉候段、恐悦至奉存候。陳者先般御門下中村要先生御他界遊ばされ、定めし御愁傷之御事と恐察奉候。陳者、當時、小生儀、療養の爲伊豆にありて、御弔問にも罷出事相叶ず、誠に御無禮の段、平に御海容の程奉願上候。扱て、小生事故人より一方ならぬ御殊遇を蒙り居りたる者に付、訃報を紙上にて知るや、只々茫然自仕候。氏の前に氏なく、氏の後に氏なかるべく、實に、京大の大々の御損失に止らず、皇國學界の大損失に有之、光學界の巨星地に墜ち、又光明を仰ぐ能はざるの感有之候。

(中略) 先は、略儀にて、恐れ乍ら書中を以て、右御報告申上度、斯如御座候。恐惶謹言。

十一月八日夜

射場保昭拜

山本臺長先生御座下

### ベルリン計算局コフ博士より

Berlin-Dahlem, den 3. November.

Dear Prof- Yamamoto,

I hear from your latter of October 7, 1932, that Mr. K. Nakamura died on September 24. We regret mostly this loss of your Observatory and of our science. We regret especially the loss of such an able observer as Mr. Nakamura was.

But we thank you also for your announcement, that the work will be continued by M. Inaba.

Yours very truly,

(Signed) A. Kopff.